



商友会ニューズレター

OCU BUSINESS ALUMNI NEWS

No.14・March 2018

目次

- 巻頭言：大学の国際化は教員から…………… 1
- 五代基金の継続プロジェクト…………… 2
- 太田ゼミの海外研修報告…………… 2
- OBからのメッセージ…………… 2～3
- 商学部の志願者状況…………… 2
- 卒業生の就職先一覧…………… 4
- 公共経営学科の案内…………… 2

巻頭言：大学の国際化は教員から



早稲田大学商学大学院商学部教授
谷本 寛治 (商学部 昭和53年卒)

ここ数十年、グローバル化の進展に伴い大学も国際化していかなければならないと叫ばれてきました。国際と名称のつく大学や学部の創設、短期留学の制度化、留学生の呼び込み、使える英語の取得を目指したTOEICの義務づけなどが進み、さらに最近では英語の授業を増やそうとやっきになっています。

大学制度を批判する人はたくさんいますが、しかし多くの教員や学界自体が国内志向の狭いコミュニティの中にあり、国際化が非常に遅れていることを反省する必要があるように思います（とくに人文・社会科学では）。国際的なJournalに論文を投稿したり国際学会で報告するにとどまらず、それぞれの領域における広いアカデミック・コミュニティに参画し、国際的な研究・教育のネットワークの中で役割を担い貢献していくことが期待されています。そういった経験のない教員が学生に国際化の何を教えられるのか。また授業において、自分の知っていることを一方的に話すというスタイルではなく、読む、考える、議論する、書くという基本的なことを授業に組み込んできたでしょうか。

近年、世界の大学間競争は非常に激しいものがあります。例えばThe Times Higher Educationの大学ランキングによると（その評価基準は、教育、研究、論文の引用の3項目で全体の90%、国際化は7.5%それはある意味当

然）、トップ50でアメリカ25校、イギリス7校、ヨーロッパ大陸7校、アジア・オセアニア11校とアメリカの強さは変わりませんが、その他の地域で変化が見られます。日本は100位以内に東大、京大の2校があるだけで、あとは200位内にも入っていません。またビジネス教育に関して言えば、例えばグローバルスタンダードとなっているAACSB (Association to Advance Collegiate Schools of Business) の認証を受けた大学は世界800校近くありますが、日本は3校しかありません。中国、台湾、韓国はそれぞれ10校以上あり、日本は大きく立ち後れています。少子化が進み大学の生き残り策の一つとしてアジアの学生を集めようとしています。国際的に通用しない学位に魅力があるのか、優秀な学生が来るのかという問題があります。

日本の大学評価は偏差値が中心にあり、そのブランド力は学生サービス、歴史・伝統、就職実績、学生や卒業生の活躍、教員の社会に向けた発信度などで測られており、基本的に国内的なものです。これは日本の社会が大学や大学人に何を求めてきたかということの反映だと思います。日本の大学は国際的な競争から取り残された厳しい状況にあることを認識しなければならないのですが、大学論として語る前に個々の教員が自分の問題として考える必要があると思います。

お詫び：
前号No.13の就職一覧は平成29年3月卒業生のもので
はございませんでした。ここにお詫び申し上げます。